

ベーシック・エンカウンターを考える

1. Tグループとエンカウンター・グループ

・どちらも10人程度の小集団でのグループセッションを中心とした集中的なグループ体験を行う人間集団のこと。

* 「エンカウンター・グループ」；集中的グループ体験を行う集団。「グループ・エンカウンター」集中的グループ体験の技法。

・ロジャーズの言葉；「今世紀最も急速に拡大している社会的発明，おそらく最も将来性のある発明であろう。それはいろいろな名称で通っているが，<Tグループ>，<エンカウンター・グループ>，<感受性訓練>というものが最も一般的である」
このように，両者は同様のものと捉えられることも多い。

【類似点】ねらい，宿泊形式，ファシリテーター（促進者），自由討議

【相違点】エンカウンター・グループは，メンバー個人の成長に力点が置かれる。Tグループは，個人的な体験の場としてだけではなく，他者との相互作用を体験し，グループプロセスを理解するという人間関係技法的な面について，メンバーの成長のために学びの場を設定している。

2. カール・ロジャーズとエンカウンター・グループ

・1940年代後半，シカゴ大学にて「学生中心教授法」。エンカウンターグループの母体となる。

・1958年，ファーソンらが行ったワークショップが人間関係そのものを目的としたグループ体験の最初のもの。

・1959年，ファーソンと共に西部行動科学研究所設立。1963年，ウィスコンシン大学から研究所へ。

<ロジャーズはなぜ，エンカウンターグループに惹かれたのか？>

・カウンセラーの3条件（無条件の肯定的配慮，共感的理解，自己一致，1957「治療的人格変化の必要十分条件」）が果たして，健常者の人間としての成長を促進しうるか否かというテーマに大きな関心。健常者が自発的に集まるエンカウンターグループは，その条件仮説を検証する好機だと考えた。さらに，「もっと親密になりたい」「人とふれあいたい」というロジャーズ自身の欲求があったとも考えられる。来談者中心

療法という個人セラピーから，エンカウンターグループヘロジャーズの活動が変化したのはそうした理由があると考えられる。

・1968年，西部行動科学研究所を去り，人間研究センターをラホイヤに設立。残りの生涯を全てここに捧げる。

・主義，思想，人種，慣習などの違いを超えた大規模なエンカウンターグループを宿泊制で展開。その名称を1975年頃から，「パーソンセンタード・ワークショップ（アプローチ）」として用いるようになった。

・「静かなる革命」の世界的展開。アメリカにとどまらず，ブラジル(1976)，日本(1983)，ソ連(1986)にてワークショップ開催。参加した一人一人が，それぞれの持ち場で，もっと人間を信頼し，個々人により大きな決定権を与える方向へと改革運動を起こしていき，それが自然発生的かつ連鎖反応的に広がった。それゆえに「静かなる革命」と呼ばれた。

・世界平和への取り組み。パーソンセンタード・アプローチを用いた人種間，国際間，異文化間の緊張緩和への取り組みも展開。北アイルランド，ベルファストにおけるプロテスタントとカトリックの葛藤の緩和(1973)，南アフリカの人種差別をめぐる黒人と白人の対話(1986)，オーストリア，ルストにて開催の中央アフリカ諸国の緊張緩和(1985)など。1987年に亡くなったロジャーズはノーベル平和賞にノミネートされた。

北アイルランド，ベルファストでのワークショップ

【北アイルランド紛争とは】

地域人口の4割を占めるカトリック系住民が「アイルランド帰属」を求めて，イギリス領土の現状を守ろうとする多数派のプロテスタント系住民と対立し続けていたイギリスとアイルランドの怨念を背景にした世界的な紛争。

1969年から過去30年間，テロや暴力によって3000人以上の犠牲者を出してきたが，1998年4月10日の和平合意達成（イギリスのブレア首相，アイルランドのアハーン首相）以来，その和平案の是非を問う住民投票，国民投票，地方議会選挙によって，最終解決，歴史的な和解への道筋を歩み始めた。しかし，その後，IRA（カトリック系反英武装組織アイルランド共和軍）の非武装化が最大の難関となり，未だに和平への道は遠い。

【ベルファストでのワークショップ】

ロジャーズらは，1973年，5人のプロテスタント住民と4人のカトリック信

者からなるグループでワークショップを実施した。数代に渡る経済，宗教，文化的憎悪をはらむメンバー同士の集まりは，当初，全く変化が期待できないと思われたが，プロテスタントのデニスと，カトリックのベッキーが夕食後10分間の話をして，友情を感じ始めたのをきっかけに，両グループの緊張が緩和された。当初は，隠蔽されていた両グループの憎悪や不信がよりオープンに表現され，そのような感情表現がお互いの理解を深めていった。わずかに16時間のワークショップが両グループの根強い憎悪を和らげた。（このワークショップは，「鋼鉄のシャッター：スチル・シャッター」として，記録されている）

参加メンバーはグループの解散後も，ほぼ全員がリスクを背負って自発的に集まり続け，両陣営それぞれの教会で「鋼鉄のシャッター」を上映し，討論会を続けた。

3. ベーシック・エンカウターの実際

平成 年 月，3泊4日のベーシック・エンカウターの体験を通して感じたことを以下にまとめる。

(1) プログラム

・4日間のプログラムは基本的にはメンバーが決める。大まかな流れの案はスタッフが提示するが，それをそのまま受け入れるか，変更していくかはメンバー全員が決めていく。「在りたいようにあれ」という実存の哲学がそこに流れている。

・2～3時間を一つのユニットにして，ラージグループ，スモールグループなどの形態でシェアリングが始まる。ファシリテーター（促進者）は「さあ，どうぞ，自由にはじめてください」という感じで，開始を告げる。

(2) シェアリングの様子

・沈黙が20分，30分と続く場合もあるし，メンバーが自由に自己を語り始めることもある。何かしらのテーマが決まっているわけではない。ただ，一人の方が語り終わると，それと全く異なるテーマに流れていくというのでもない。やはり，前の方の発言に重なっていくというイメージはあった。

・話がつれてきたり，言いたそうにしているような表情が見えた人に対しては，ファシリテーターが，「さん，よかったらどうぞ」のように，まさに促すこともあった。何かあればファシリテーターに助けてもらえるという安心感はグループの中にあっただと思うが，基本的には，メンバー同士の語りでシェアリングが進む。

・構成法のように，「アイメッセージで」，「相手の時間のことも考えて」などの介入

は一切ない。語りた人が、自分の思いのままに語り合う。

(3) ワークショップを終えて感じること

・「もっと親密になりたい」「人とふれあいたい」というロジャーズ自身の欲求が、彼をエンカウンターグループに没頭させていったわけだが、まさにそれに近い感覚を味わった。出会ったメンバーと離れがたくなるのを強く感じた。

・沈黙がかなりの時間を占めるが、それは自分との対話の時間であり、人生の中で、こんなに贅沢な時間を持ったことがあるだろうかという思いがあった。

・ワークショップには日本全国から、さらに外国籍の方も数名参加し、文化を越えたつながりを強く感じた。「人は、人の中で、人になる」を身をもって実感した。

・学校という場所では、構成法が意味を持つだろうと思う。そして、構成法は自己成長を図る上で、最初の第一歩を踏み出すには最高のグループが生まれるだろう。しかし、「もっと親密になりたい」「人とふれあいたい」という思いがもっと強くなり、自分の責任において、自由という枠を決めることができるならば、ベーシック・エンカウターの居心地の良さを感じることができるだろう。

・ロジャーズが「20世紀最大の発明である」と言った、エンカウンターグループの意味がベーシック・エンカウターを体験することではっきりした貴重な4日間であった。

「エンカウターを自分のフィールドに！！」と思う人は、是非、ベーシック・エンカウターの体験を！！

～自分が自分になるためのきっかけがそこにあるかもしれません～

< 参考文献 >

- ・Tグループとエンカウンター・グループの類似点と相違点．山本智也．2001
- ・北アイルランド 和平．www.local.co.jp/news-drift/comment-wahei.html.2001
- ・カールロジャーズ入門～自分が自分になるということ．諸富祥彦．星雲社．1997